

「イエスの母、兄弟」という小標題が掲げられます。マタイは本日の箇所をマルコ3;31-35を資料として用いています。マルコでは「ベルゼブル論争」(マルコ3;20-30)の直後に配置された物語です。そこではイエスの家族の訪れの理由を、イエスが「気が変になっている」(マルコ3;21)から「取り押さえに来た」(同21)という文脈の中で述べられます。しかし、マタイが生きた時代ではイエスの親族と称される人々は厚遇されていましたので、このような伝承は不適當とされ、マタイは省略して前後の文脈とは何の関係もない独立した物語として編集しています。そのためマタイはマルコの「母上と兄弟姉妹がたが外であなたを捜しておられます」(マルコ3;32)を「母上と御兄弟たちが、お話ししたいと外に立っておられます」(47)と書き換えています。このため文意の流れがたいへんスムーズになりました。

また、マルコとの比較から分かる相違点は、イエスを取り巻く人々とは誰だったのかということです。マルコではその人々を「わたしの母、わたしの兄弟」と言うのに対し、マタイでは「弟子たち」を指しているという点です。つまり、マルコではすべての人がイエスの母であり兄弟姉妹なのです。ここでは狭い身内意識や偏った民族主義を越えてゆこうとする思想の芽生えが見受けられます。

一方、マタイではイエスの兄弟とはまず彼の「弟子たち」であることが条件となるのです。そして、この弟子たちとは教会に属する信仰者に他なりません。このようにしてマタイはマルコが持っていた伝承の本来的な目的、つまり、普遍的な人間観を教会の特権的地位保障の言葉へとすり替えたのです。

ただ、すり替えるなどという悪いイメージを抱いてしまいがちですが、そうではありません。マルコが提案する漠然とした抽象的な思想を、マタイは具体的な世界への宣教の言葉として橋渡しをしたと言えれば分かり易いかと思いま

す。この後、イエスが再び弟子たちを「兄弟たち」と呼ぶのは復活後の時点(28;10)、つまり復活を福音として、信仰者は世界に向かって広く宣教する責務があると明言するマタイの新しい提案なのです。

更に、マタイは弟子だけがイエスの「兄弟たち」と限定してはいますが、物語には肉親の絆を超えて立てられるイエスとの兄弟関係の世界をも示しています(48)。母を頂点とする肉親とは民族や国家のことでしょう。しかし、福音とはそれらを超える質を、復活という出来事を通して、すでに帯びているのです。そして福音は世界への言葉となるとマタイは語るのです。

マルコの示す普遍的人間観は、ともすれば同じような価値観を持つ狭い仲良しグループに留まりかねません。その絆が親子関係みたいに固ければ固いほど、排他的になってしまうのです。マタイはこのことを断じて赦してはならないと言うのです。それが信仰の交わりであると語るのです。

信仰においては、区別をもたらすような一切はすでに手放されたのだということなのです。そこにはイエスの十字架と復活のみが基準になるのです。ですから、信仰が信じる者と信じない者とを区別する規準になってしまうなら、それは誤りなのです。教会、そして信仰とは、同じ価値観において狭く結束することではなく、あらゆる排他性を広く破ってゆく点にあるのです。